

は し が き

インドの哲学思想が人類の偉大な知性の所産であることは、贅言を要しないであろう。しかも、それは最古代において美事に開花し、爾来、今日に至るまで連綿として伝統が継承されてきているのである。

インドをみる場合に、東洋のなかにふくめるのが、これまでの通例であった。ところで、西洋に対する東洋という地球上の地域的な両極観念は、今日ではもはや古典的な枠組みのようにすら思われる。また、ヨーロッパの哲学の視座からインドの哲学思想を取扱うことも、インドの英領植民地時代以来、非常に長い間おこなわれてきたのであった。

第二次大戦後、インド共和国が誕生してからは、インドの哲学思想をまずもってインドそのものに即して理解し、そのことによってそれを人類の思想の歴史に正しく位置づけようとするようになったのは、よろこばしいことだといわなければならない。

Sambhāṣā は、そうした学界の趨勢のなかで生まれたささやかな研究誌である。したがって、本誌は本学文学部インド哲学研究室の発行ではあるが、執筆者は国の内外を問わず広く学界に門戸を開いている。同学の士の自由な研究発表を期待するゆえんである。

第5号は装いも新たに増頁して世におくり出すことになった。所載の論文はいずれも気鋭の学究の成果であって、今日的な課題をふまえた内容を持ち、いずれも学界に寄与するところ決して少なくないことを確信する。

大方のいっそうのご支援をお願いいたし、なおまた本誌がますます発展するように心から期待して、発刊のよろこびの粗辞としたい。

1983年 9月 20日

宮 坂 有 勝